

語学・文学・教育における借用に関する再考

—「借用語と日本社会」シンポジウムを振り返って—

林 廷修

一 まえがき

日本は早い時期から中国由来の漢語や、英語及びヨーロッパの諸言語から数多くの語彙を借用している（松井一九八二、三二〇—一四など）。特に、グローバル化の進展によつて新しい概念や物事を表すため、外来語流入が急激な勢いで進行している。また、外国人の受け入れを拡大させようとする政府の最近の政策から考えても、その勢いはますます加速していくものと考えられる。

そのような背景から、第四十二回筑波大学日本語日本文学会における「借用語と日本社会」と題したシンポジウムは、言語、文学、教育の三つの異なる分野からのアプローチについて検討することを目的として開催された。本稿では、まず、筆者の言語分野からは借用語をどのように捉えられるかを見るため、このシンポジウムで筆者が発表したパイロット調査の結果を報告する。次に、筆者の専門外の分野では同じ考察対象をどのように捉えられるかを見るため、筆者以外の各パネリストの発表内容を簡単にまとめて紹介する。また、これらの発表内容

とパネルディスカッションでの意見交換を踏まえて、三つの分野の連携と今後のめざすべき方向についての若干の私見を含めて述べる。

二 対照言語学的な視点から見た借用語

—日韓外来語の受け入れの現状について—

ここでは対照言語学的な観点から見た借用語、その中でも外来語に焦点を当てて論じた内容の概要を報告する。

他言語からの借用は、多くの言語で観察される。借用の時期にずれはあるが、このことは日本語だけでなく韓国語においても同様の現象が見られる。そこで、言語的類似性を多く有する日本語と韓国語の両言語を対象とし、新聞記事に見られる外来語を語彙、文法、文字・表記という三つの側面からパイロット調査を行った。

外来語の受け入れ方や現状を明らかにするための資料としては、日本の『毎日新聞』と韓国『동아일보（東亜日報）』（いずれの新聞も二〇一八年一月〜三月、毎週木曜日刊行の社会

面)を使用した。ここで毎週木曜日と限定したのは、週末や休日、特定トピックなどによる外来語への影響を排除するためであり、一年間における曜日ごとの休日を調査した結果、両国ともに木曜日がその影響の最も小さい日であった。調査方法としては、まず、新聞から使用されている外来語のすべてを目視で抽出した。その際、ウェブ上の国語辞書で原語表記されているものを基本的に外来語と見なしたが、この他にも和製外来語(例：パワーハラスメント)、韓製外来語(例：퀵서비스(quick service))、混種語も取り入れている。また、合成語(例：ソーシャルネットワーキングサービス(SNS))の場合はそのままを一つの外来語として扱い、略した頭字語も抽出した。但し、人名、地名、国名、企業名の固有名詞は除外した。

次に、各外来語がどの用法として用いられているかを見るため、使用外来語を基準とした前後関係と文中でのはたらしきなどを総合的に考慮し、各外来語の品詞を判断した。

調査結果をまとめると、語彙の側面では日本語が韓国語より外来語の全体的な使用頻度²⁾が高いことと、外来語の種類が多岐に渡っている(異なり延べ比³⁾が日本語は〇・三九三、韓国語は〇・三〇七)ことの二つを指摘した。前者の使用頻度に関しては、定量的に再検討することができ、従来の研究結果(中村一九六八、申二〇一〇など)とほぼ一致していることが分かった。一方、後者の外来語語彙の多様性に関しては、以前あまり議論されてこなかったが、ここである程度の傾向が認められた。それに加えて、日本語は外来語と置換可能な和語や漢語が存在する(六三・七%)にも関わらず、多くの外来語を使用す

る点で、韓国語(五三・一%)と対照的であることも指摘した。具体的には次のような例が挙げられる。

- (1) 同館は「レア」**【↓稀】**な姿に会えるのは冬場だけ」と、雪国「青森県」も併せてPR。

(毎日新聞、二〇一八年一月四日)

- (2) 17일에는 전자댄스뮤직(EDM)과, 치맥(치킨과 맥주)、파티**【↓모임(集まり)】**를 결합한 스키 페스티벌**【↓축제(祝祭)】**도 열린다.

(十七日には電子ダンスミュージック(EDM)と「チメク(チキンとビール)」パーティーを結合したスキーフェスティバルも開かれる。)

(동아일보, 二〇一八年三月十五日、筆者訳)

次に文法的側面では、大体の外来語が名詞、動詞、形容動詞(韓国語의「형용사(形容詞)」)の用法として使用されていることと、日本語の方(一・九%)が韓国語(一・二%)に比べてより多様な品詞として使用されている傾向を確認した。^(3a)^(3c)の例で分かるように、日本語における「オープン」がそれぞれ名詞、動詞、形容動詞として用いられていることが見て取れる。反面、^(4a)と^(4b)の韓国語における「인터뷰(interview)」は、名詞と動詞として用いられていることが分かる。

- (3a) 千葉県富津市の潮干狩り場で二十日、オープン(三月十八日)を控えた「試し掘り」があった。**【名詞用法】**

(毎日新聞、二〇一八年二月二十二日)

- (3b) 訴訟記録によると、男性は二〇一五年三月にオープンした販売店で店長に就任。**【動詞用法】**

(毎日新聞、二〇一八年一月十八日)

(3c) 佐川氏は喚問で、公示地価など「オープンな話をする」とはある」と軌道修正。【形動用法】

(毎日新聞、二〇一八年三月二十九日)

(4a) A씨가 일하는 학원에 전화해 기자를 사칭하며 인터뷰를 요청한 적도 있다. 【名詞用法】

(Aさんが働いている塾に電話し、記者を語りながらインタビューをお願したこともある。)

(동아일보、二〇一八年二月二十二日、筆者訳)

(4b) 동아일보 취재팀은 현재 가상통화에 투자한 2030세대 10명을 대면 또는 전화로 인터뷰했다. 【動詞用法】

(東亜日報の取材チームは、現在仮想通貨に投資した二〇三〇世代の十名を対面又は電話でインタビューした。)

(동아일보、二〇一八年一月十一日、筆者訳)

さらに、日韓両言語に借用された言葉の一部は、原語には存在しない新しい用法として使用されていることも分かった。例えば、動詞用法として使用される日本語の「イメージする」と韓国語の「모니터링하다 (monitoring-ha-ta)」が挙げられる。原語における動詞用法は、それぞれ「imagine」や「monitor」である。このことから、日本語の「する」やそれに相当する韓国語の「하다 ha-ta」を添えて変形した形で用いることが観察できた。

最後に、文字・表記の側面では、日本語は外来語の数量詞を片仮名で表記する傾向が強い反面、韓国語はその殆どをローマ字の記号で表記するという特徴が見られた。これは、日本語が

外来語を表記する専用の片仮名文字を持っているのに対し、韓国語はそのような文字体系を持っていないことと関係があるように思われる。

まだ十分に触れきれないこととしては、両言語における品詞派生の度合いの違いの原因や外来語と既存語との関係などが挙げられるが、これらについては別稿で詳しく述べることにする。

三 日本語学、文学、教育の観点から見た借用語

本パネルディスカッションの趣旨は、これから新しく入ってくる言葉を借用するに先立ち、既存の使用状況を広く見渡し、今後の対処方略などを検討することである。この趣旨を踏まえて、各パネリストが次の題目に関する内容を発表した。「外来語の文法研究・形態論研究」(田川氏)、「『伊勢物語集註』における漢語の借用」(安氏)、「グアンの教授法を借用した山口喜一郎の日本語教授法―台湾の実践から韓国の実践まで―」(金氏)。

それぞれの発表内容を簡単に紹介すると、田川氏の「外来語の文法研究・形態論研究」の発表では、外来語の動名詞と接辞を主な考察対象として取り上げ、そこから見られる言語現象と問題を整理する内容になっている。また、安氏の「『伊勢物語集註』における漢語の借用」の発表では、「『伊勢物語』の江戸前期の注釈書である『伊勢物語集註』から見られる漢語を、『伊勢物語』先行旧注と比較する内容になっている。なお、教

育の視点から考察した金氏の「グアンの教授法を借用した山口喜一郎の日本語教授法―台湾の実践から韓国の実践まで―」の発表では、借用の範囲をより広く捉え、フランス人であるフランソワ・グアンの言語教授法を山口喜一郎がどのように受け入れて応用、開発したのかについて指摘する内容になっている。上述した三つの発表とは考察対象が若干異なるが、借用した教授法を基に台湾や韓国に日本語を普及する点で、台湾と韓国の側から見れば、日本語の借用であると考えられる。

このように、様々な分野の方々から多面的な話題提供をしていただき、議論を行う機会となったことは極めて有益であった。また、異なる視点を有することの重要性についても次第に理解されるようになってきたと思われる。

四 パネルディスカッションの成果と今後に向けて

今回のパネルディスカッションを通じ、借用語が各分野において重要な問題として取り扱われていることが確認できた。すなわち、借用語が日本社会に重要な位置づけを示すことが示唆されたのである。この重要性を考慮すると、言語と文学、そして教育との密接な連携が必要であると思われる。具体的に言えば、まだ受容されていない新しい言葉がどのような仕組みで日本語の言語体系に入ってくるのか、また借用された語が実際の言語生活の中でどのように使用されているのかなど、言語研究から得られた研究成果を教育分野に適用することが可能と思われる。また、小説やエッセイなどの文学作品にどのような借用

語が現れているか、またそれらの語が作品のなかでどのような意味特徴を持っており、読者としての我々ほどの程度理解しているのかといった文学からの研究成果も言語や教育分野に十分反映できると考えられる。さらに、教育分野からは国語科教育において借用語の取り扱いがどうなっているのか、あるいは実際の教育現場でどのように教育されるものなのか、経験的なものも含め、教育研究・教育者の視点からの情報提供ができると思われる。

以上のように、三つの分野の連携により、ある一つの分野のアプローチでは見えにくい現象や問題の要因の可能性を探ることができることから、筆者の外來語研究の意義を再考することができた。一方、今後グローバル化が進展し、新しい語がどんどん浸透していくと予想される日本社会において、常に様々な問題意識を共有し、連携することによる課題解決が必要であると判断される。特に、三つの分野の連携によって課題を解決することで、各学術分野の発展のみならず、異分野との相互理解、協力関係の発展のための先駆的役割を果たすことが学界には求められていると考えられる。

【参考文献】

- 申政澈(二〇一〇)「窓ぎわのトットちゃん」語彙から見た日本語と韓国語の語彙」田島毓堂編『日本語学最前線』和泉書院六十三頁から七十九頁
- 鈴木崇史・景浦映(二〇一〇)「名詞の分布特徴量を用いた政治テキスト分析」『行動計量学』第三十八巻第一号八十三頁から九十二頁
- 中村映枝(一九六八)「現代朝鮮語の辞典見出語における語彙の分布状況」『朝鮮学報』第四十九輯朝鮮学会九頁から二十五頁

松井利彦(一九八二)「漢語・外来語の性格と特質」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙2 日本語の語彙の特色』明治書院一四九頁から一七七頁
조남호(二〇一四)「한국어의 외래어 수용과 대응」『인문과학연구논총』第三十五卷三輯 명지대학교 인문과학연구소 十三頁から三十八頁

注

- (1) ここで利用したのは、日本の「三省堂ウェブデイクシヨナリー」と「コトバンク」、韓国の「국립국어원 표준국어대사전(国立国語院標準国語大辞典)」と「국립국어원 우리말샘(国立国語院우리말샘)」である。ウェブ上の国語辞書を用いた理由は、紙媒体の辞書に比べて比較的新しい外来語も挙げられている場合が多いためである。
- (2) 日韓両新聞における総文字数が異なるため、外来語全体の頻度を一万字当たりの頻度に換算した。その結果、日本語二十七、韓国語二十(異なり)、日本語九十四、韓国語六十五(延べ)であった。
- (3) 異なり延べ比は、標本に含まれている語彙の多様性を表し、その値が大きいほど語彙の多様性が高い(鈴木・影浦二〇一一)。

謝辞

パネルデイスカッションでパネリストを務めてくださった田川拓海氏、安倩氏、金ボイエ氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

(いむ) じよんす 筑波大学大学院 博士課程

人文社会科学研究所)